

「天地返し」 — 神奈川県山北町

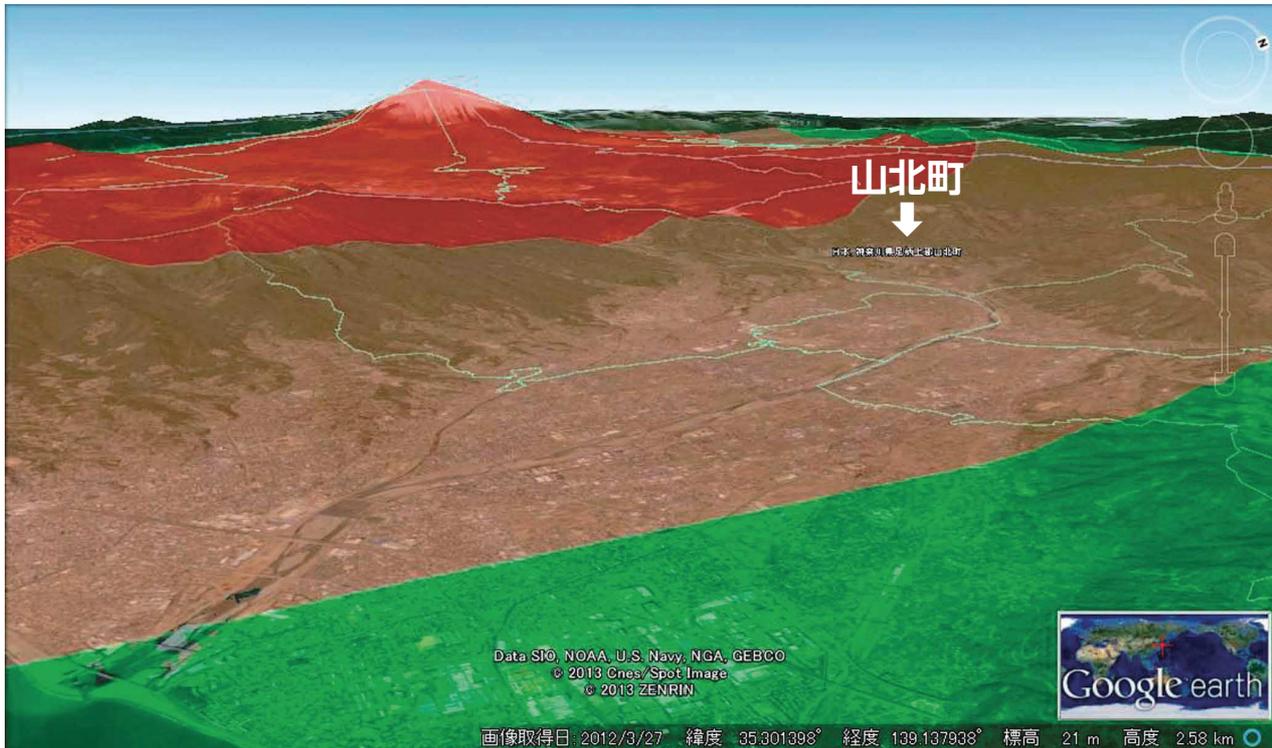


図1 富士山東麓の想定降灰量
(神奈川県西部, 赤: 50 cm, 橙: 30 cm, 緑: 10 cm)

KMZ

PDF ファイルで公開されている富士山の「降灰可能性マップ」をトレースして Google Earth に重ねてみると、降灰が予想される場所を地形と絡めて考えることができる(図1)¹⁾。

神奈川県の最西端、南足柄郡山北町は、1707年12月16日(旧暦:11月23日)の「宝永の噴火」で大きな被害を受けた。元禄16年(1703)年の「元禄地震」(南関東直下型:推定M8.2)、宝永4年10月28日の「宝永地震」(東南海プレート型:推定M8.4)で被害を受けた上での降灰である。翌1708年6月22日の酒匂川、皆瀬川沿いの村が水没する大水害が発生したが、地震で地盤が緩んでいるところに上流の村人が田畑に積もった「焼け砂」(火山灰)を谷に捨てたことによる、大規模な複合災害があったとみられる(図2・写真2)。

平成15年(2003年)、町の教育委員会は、戦国時代の城跡の発掘調査でみかん畑の地下から大量の火山灰の埋設跡を発見した(写真1)。火山灰にまみれた表土を剥いで穴に埋め、地下の土壌を表に出す「天地返し」と言われる工法の遺構である(図3)。

復興が絶望的とされ、藩にも見放されて「棄村」も検討されたなか、文字通り「一所懸命」に働いた農民の意地と為政者の苦悩は、新田次郎の小説『怒る富士』に詳しい。豊かな実りと清らかな水を取り戻した先人の苦闘に思いを馳せ、被災地復興への想いを新たにしたい。

1) 内閣府富士山ハザードマップ検討委員会報告書、79p.「降灰可能性マップ」
<http://www.bousai.go.jp/kazan/fujisan-kyougikai/report/pdf/houkokusyo5-5.pdf>

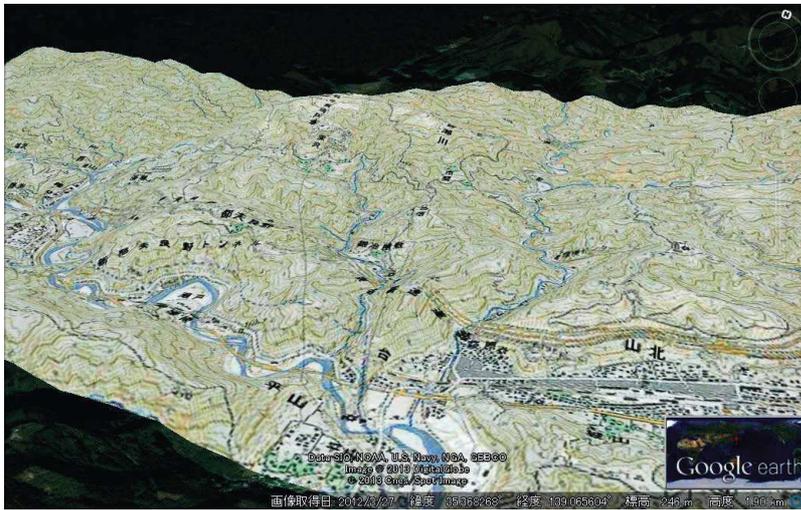


図2 山北町中心部の地形概観 (2万5000分の1地形図:「山北」より作成)

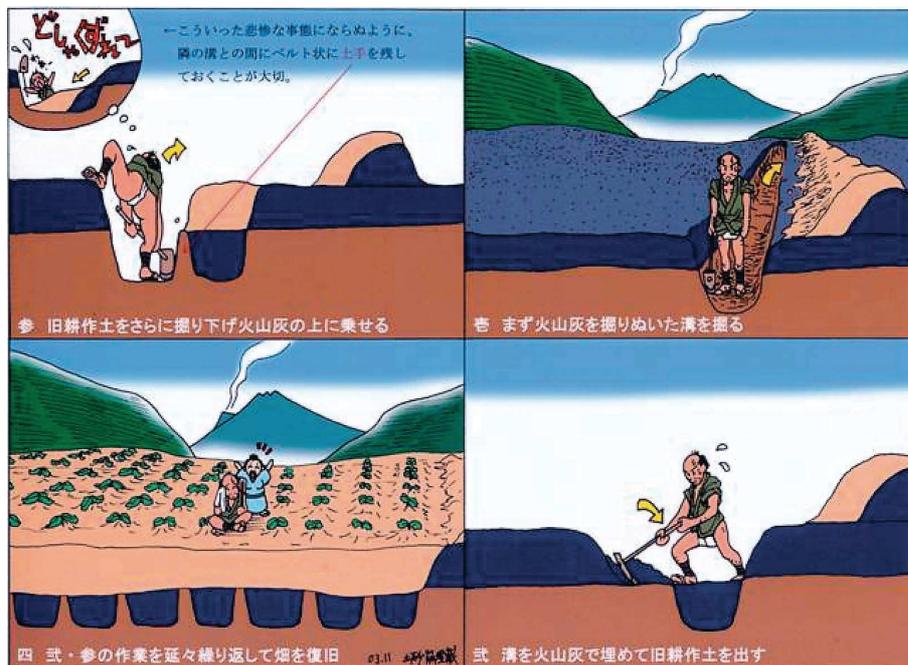


図3 「天地返し」の解説

井上公夫 (2004) 「元禄地震 (1703) と富士山宝永噴火 (1707) による土砂災害と復興過程—神奈川県山北町における最近の史料学・考古学的成果による再検討—」, 歴史地震 (20), pp.247 ~ 255. http://sakuya.ed.shizuoka.ac.jp/rzisin/kaishi_20/34-Inoue.pdf



写真1 出土した「天地返し」の遺構
(山北町教育委員会提供)



写真2 皆瀬川の谷より東名高速道路を望む
(2013年2月, 筆者撮影)

KMZ 図1 <http://www.ninomiya-shoten.co.jp/kml/ictz/106/fig1.kmz>